View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

淑徳大学短期大学部 研究紀要 第63号（2021. 2）

研究ノート

保育者養成校における領域「表現」の授業に関する考察
―遠隔授業においてICTを活用した学生協働造形等演習事例―

橋 本 聡 子

（受理日：2021年１月５日）

A Consideration of Educational Methods in the Field of “Expression” at Early Childhood Developmental Course
—Examples of exercises such as student collaboration modeling using information and Communication Technology in distance learning.—

Satoko HASHIMOTO

要　旨

未曾有のコロナ禍により2020年度の学修環境はICT教育システムを利用した遠隔授業主体となった為、領域「表現」授業は、対面授業で行われているアクティブラーニング形式の演習形態を取り入れるべくICT機器を用いた双方向型遠隔授業形態を試みた。結果、オンライン上の強みを活かし、対面授業と同等、内容によっては対面授業より向いているものがあったので紹介する。

キーワード：領域「表現」、造形活動、オンライン授業、ICT活用

Ⅰ．はじめに

領域「表現」の授業は演習授業形式を取り入れ、学生が子どもの時の感性を演習を通して再体験・再確認し、その感性や表現の育ちの大切さを実感した上で保育に携わることを目指している。また、表現とは一人一人が持つ個性を活かして個々の内面で思い描いたものを外に表すことであり、幼児期は遊びを通して自己を表現する。学生は演習を通し表現遊びを経験し、自分を表すことの楽しさを実感することが大切と考える。今回はICTのベースとして大学の提供するchromeOS端末×Gsuite for Educationを使用してアクティブラーニングの環境を作った。本学修環境を通して、他の学生の表現に触れることが出来、オンライン上であってもねらいを習得することにつながり得たと考える。

今回、コロナ禍の影響を受けてオンライン上でアクティブラーニング形式を取り入れた。戸惑いはあったもののオンライン教育環境は「個別の学修環境」の強みを活かすことができることに気づき、後述する事例すなわち学校での対面授業よりむしろオンラインに向いた演習を選んでオンライン上で各自別々の学修環境で演習を実施した。

本分野における先行研究としては「オンライン在宅学修環境における学習プロセスに関する考察 ：学習者の遠隔存在感が与える影響に着目して」教育メディア研究 12（1），7-19，2006　田口真奈，中原 淳　がある。既に14年前からオンライン在宅学修環境の研究がなされている。この研究によると「本研究の目的は，完全にバーチャルなオンライン学習環境における学習プロセスを明らかにするものである。ロボット製作に関心を持つ学習者たちが、自律型ロボットの製作活動を相互に促進しあうことが期待されて構築された、「ロボットスタジオ」という学習コミュニティシステムを分析

対象とした。コミュニティへの参加のタイプが異なる学習者を取り上げ、その学習過程を詳細に分析した結果、学習者の行動を規定するのは、「他の学習者」の存在そのものであることが明らかとなった。顔が見えず、また会うこともない学習者同士ではあったが、メールなどのやりとりを通していったん学習者が「遠隔地にその学習者が確かに存在する」という遠隔存在感を獲得してしまうと、学習者たちは、face to faceで行われるコミュニティ同様、互いに励まし合ったり、ライバル意識をもったりという学習者同士の相互作用を行っており、そのことが学習を促進したり制約したりしていることが明らかとなった。」[1] とある。

この研究を踏まえ、学生がオンライン上で自己の発想を言葉や造形物で表現し、それに他者の言葉や造形物が繋がり合わされて新しい一つの表現となるといった学生同士が相互に影響を与え合うタイプの演習内容を取り入れた。

Ⅱ　オンライン授業の強みを活かし対面授業では難しい活動を取り入れる

① 対面授業では取扱いの難しい素材を取り入れる事例「小麦粉粘土製作演習」（後述）

小麦粉粘土製作演習は小麦粉アレルギーを持つ体質の人が在籍する場合、一斉活動が難しい。しかし、学修環境を共有しない遠隔授業においては小麦粉に限らず米粉や紙など体質に沿った粘土素材を選ぶことが出来る。安全に配慮し個別性を尊重しながら演習が出来るという利点がある。保育現場も同様に小麦粉アレルギー体質の人（子ども・大人）に細やかな配慮が必要になっている。粉は拡散する性質がある為、園全体で考える必要もあり、実施クラスに在籍者は無くとも安易に取り扱うことは出来ない。しかし、学生には素材から粘土を作る過程を経験して保育者となってほしい。それは油粘土とは違い、小麦粉や米粉など口に入れても安全な素材で出来ていること、子どもの手先で自由に形作れる素材であること、という幼児期に経験させたい感触遊びに向いている素材であるという理由からである。そして感触遊びはじっくりと個別に取り組める遊びの一つである。更に粘土遊びは砂場や積み木・ブロックなどのように「作っては壊し作っては壊す」ことを繰り返すことが出来る。そして、一人で又集団で試行・思考を繰り返すことが出来る。足で踏むことも出来、手足全体で感じる感触遊びにも繋ぐことが出来る。小麦粉等の遊びは食にも繋がる素材である。うどん作りや米粉で作るお団子作りへと家庭全体で関わることが出来る。むしろ家庭で行いたい遊びの一つである。

紙も同様に様々なテクスチャーに触れ、ちぎる・切る・貼るなど「作っては壊し作っては壊す」ことを繰り返すことが出来る素材である。更に、水を加えて紙粘土を作ることもできる[2]。この工程の中では小さな紙の粒子が舞い上がりハウスダストアレルギーの人には向かない活動であり、子どもによっては参加できない場合がある。その他アレルギー症状には日光アレルギーや蚊・蟻等虫によるアレルギー体質もあり日常的な外遊びにも支障をきたす状況も出てくる場合がある。子どもの育ちには、室内外の様々な環境を通した遊びが必要であるが、健康上困難な子どもには、集団保育活動での配慮が必要である。遊びを十分に経験させたい幼児期だが体質等の配慮が必要な為、一斉活動としては実施困難な内容もある。

今回は保育者養成校内演習の話題であるが、保育者養成の段階で様々な体質や環境の中で育つ子どもたちに合わせた保育の在り方を考えていく時、このオンラインを活かした保育実践経験は個々に合った保育内容を考えるという意味において大きな経験となる。家庭も遊びの環境の一つである。オンラインを活用することで個別性や安全性が保てる家庭環境で個々の遊びを更に豊かに広げる可能性がある。

② 身近にある道具・身の回りにある素材を授業内に取り入れる

教室から離れて家庭内を学修環境にすると身近なものから出る音、例えば台所にある道具から出る音を聞いてみることが出来る。生活の中でイメージを豊かにする演習は一教室から提示するより様々な家庭内で行うことで遊び環境の理解を深めることができると考える。乳幼児期の子どもは家庭内の物を触り探索する姿が見られる。この行動

の中から偶然、音を見つけ出すことがある。面白がって何度も繰り返す姿は楽しむ表現の姿そのものである。対面授業では、身近な物を教室へ持ち込むには限界がある。しかし、学修環境を家庭内に置き、幼児の目線で家庭の中にある素材に目を向けた時、身近な道具は音や手ざわり、匂い、形を楽しむ為の物として見えてくる。そして、道具が楽器として、身近な見慣れたものが新しい価値に感じるように、想像・創造する目線を学生自らが自らの環境の中から発見することができるようになる。子どもの生活の場が学生の学修環境と考えるとその場にいながら学修できるオンライン学習がその可能性を広げることが出来る。演習学修環境を広くとらえ、保育施設外にある子どもが過ごす環境を演習学修環境として取り入れることで、子どもの活動や育ちを幅広く後押しする目線を育てることにつながる。

③ 他者との程よい距離感を活かす

対面授業ではその場で直接表現することが常である。それは他者との協働で安心感や充実感を得ることはあるが、一方での他の表現に合わせようとする余りに自己の表現を控えてしまうこともある。しかし、オンライン上の課題提出の場合は他の影響を受けることなく、自由な発想を生み出すことが出来る。それは自分自身の発想であり、子どもの内面から出てくる表現とは子ども自身そのものであることを学生自身にも再確認させることができる。また、教師側にとっても動画や映像の提出により細やかに確認ができるメリットがある。創作手遊びや創作身体遊びの課題提出を動画提出にすることにより、学生自身も自己課題を客観的に確認することが出来る。

④ オンライン上の自由な時間の投稿ペースを活かす

対面授業での授業内コミュニケーションには限りがある。しかし、教育システム上では各自のペースに合わせたコミュニケーションがとれる。

chromeOS端末×Gsuite for Educationを使用しオンライン上クラスルームを使用することで協働学修が出来る。このシステムは同じ時間を共有する双方向型オンライン授業と違ってクラスルーム内で参加する学生が自分に都合の良い時間に編集やコメント投稿等が出来る。そこでは、オンライン上のみの繋がりであっても他の学生の発想に触れながら協働学修をすることのみならず、自分のペースで自己の発想を表現することが出来る。それは子ども同士が自分のペースで自己の発想を表現する感覚に近い。対面授業では他との協働作業においてはマイペースな活動時間は取りづらいのに対して、オンライン上では個別のペースで投稿されることが多く、投稿時間や思考に費やす時間の自由度が高い。他のペースを尊重する経験は子どもが物事を考え表現するそのプロセスを保育者側が大事に考えることにも繋がっていく。じっくりと子どもの表現を待つ姿勢は保育者としては大切な能力となる。そして、保育者はポツリと表す子どもの言葉を大切に受け止める。その受容する力にも似ている。オンライン上だけの繋がりの中で他の学生の表現を受け止めることは表情の見える対面でのコミュニケーションに比べ、文字や音声のみのコミュニケーションになる為、関係を作ろうとお互いが努力をしなければできない関係であるが、何かの作業を共に行なうことで先行研究にもあるように、関係性ができやすいことも実感できる。

Ⅲ　演習内容

今回は上記の強み（①対面授業では扱えない素材②身近な道具・身の回りのものを活かす③他との程よい距離感の中で自己の表現をする④オンライン上の自由な時間を活かす）を活かした領域「表現」の演習を実施したのでその事例を紹介する。

オンライン上で参考図書「これはのみのぴこ」[3)]を模倣した手法で、他の発想を受けて自らの発想を生む「つみかさね言葉」作成並びに、小麦粉粘土等を素材から作り、感触遊びを楽しんだ後に個別の造形物作成という2つの演習を行った。つみかさね言葉はGsuite for Education内クラスルームで学籍番号順に3週間をかけて投稿し作成した。こちらは他の学生のつみかさね言葉を読んだ上で自分の言葉を繋ぐ手法となる。造形物は製作中に互いの作品を観ることは無かったので、出来上がり後に初めて互いの作品を知った。対面授業では

他の学生の製作中の作品を観ることで自分の作品も影響を受けるが、今回はそれがなかったので個性の高い作品に仕上がった。同じ分量の小麦粉粘土作りから、個々で考えて作ったつみかさね言葉をキーワードにした作品が出来上がり、後日それを一斉に観ることにより、自他の発想の違いを確認することになった。

演習１［つみかさね言葉のグループ作成］

「これはのみのぴこ」のつみかさね言葉の手法を参考にし、10人前後のグループを作り、chromeOS端末×Gsuite for Educationを使い、３週間をかけて個別に投稿し、つみかさね言葉の創作を行った。つみかさね言葉（これはねこ，これはねこのひげ，これはねこのひげに……）は ◎言葉の意味を理解し，答えとなる物の名前を考え，推理力を養う　◎創造力や思考力を養う言葉遊びの一つである[4)]。

本演習は参考図書と同様に「これはのみのぴこ」というフレーズで開始し、以降一人１フレーズずつを前の人のフレーズに繋がるように投稿する。最後は参考図書に従って文章を教師が完結させる。まだ、学生同士の関係は個人的に親しくなった関係を除き、クラス全体は通信端末だけの繋がりであるが学修のみの繋がりの上での協働製作となる。

事例１

スタートの文章「これはのみのぴこ」

学生１は「これはのみのぴこ」に波線部分を繋いだ文章を作成

→　これはのみのぴこの仲のいい友達

学生２は学生１が作成した分に波線部分を繋いだ文章を作成

→　これはのみのぴこの仲のいい友達のお気に入りのスカート

学生３は学生２が作成した分に波線部分を繋いだ文章を作成

→　これはのみのぴこの仲のいい友達のお気に入りのスカートを買ったお店

学生４は学生３が作成した分に波線部分を繋いだ文章を作成

→　これはのみのぴこの仲のいい友達のお気に入りのスカートを買ったお店の店長

学生５は学生４が作成した分に波線部分を繋いだ文章を作成

→　これはのみのぴこの仲のいい友達のお気に入りのスカートを買ったお店の店長が飼っているチワワ

学生６は学生５が作成した分に波線部分を繋いだ文章を作成

→　これはのみのぴこの仲のいい友達のお気に入りのスカートを買ったお店の店長が飼っているチワワのいつも散歩している公園

学生７は学生６が作成した分に波線部分を繋いだ文章を作成

→　これはのみのぴこの仲のいい友達のお気に入りのスカートを買ったお店の店長が飼っているチワワのいつも散歩している公園でいつも遊んでいる友達

学生８は学生７が作成した分に波線部分を繋いだ文章を作成

→　これはのみのぴこの仲のいい友達のお気に入りのスカートを買ったお店の店長が飼っているチワワのいつも散歩している公園でいつも遊んでいる友達のお父さん

学生９は学生８が作成した分に波線部分を繋いだ文章を作成

→　これはのみのぴこの仲のいい友達のお気に入りのスカートを買ったお店の店長が飼っているチワワのいつも散歩している公園でいつも遊んでいる友達のお父さんの最近生まれた女の子

学生10は学生９が作成した分に波線部分を繋いだ文章を作成

→ これはのみのぴこの仲のいい友達のお気に入りのスカートを買ったお店の店長が飼っているチワワのいつも散歩している公園でいつも遊んでいる友達のお父さんの最近生まれた女の子が使っている毛布

教師が参考図書「これはのみのぴこ」を参考に最後の２文章を作成し終了する

→ これはのみのぴこの仲のいい友達のお気に入りのスカートを買ったお店の店長が飼っているチワワのいつも散歩している公園でいつも遊んでいる友達のお父さんの最近生まれた女の子が使っている毛布の横で寝ている猫のしゃるる

→ これはのみのぴこの仲のいい友達のお気に入りのスカートを買ったお店の店長が飼っているチワワのいつも散歩している公園でいつも遊んでいる友達のお父さんの最近生まれた女の子が使っている毛布の横で寝ている猫のしゃるるの背中に住んでいるのみのぷち（下線文章は参考図書「これはのみのぴこ」原文通り）

事例２

８グループ全て「これはのみのぴこ」から始まり「ねこのしゃるるの背中に住んでいるのみのぷち」で終えているが、展開は学生のグループにより大きく変わっていくことがわかる。(①グループは事例１で紹介)

② グループ（学生10人で作成）
これはのみのぴこの妹が好きな猫のモモがいつも遊んでいるおもちゃのくまの赤いマントをかじっている愛犬のルーキーの子どものランのボールにくっついたいもむしの彼女のいもっちのそばで寝ているねこのしゃるるの背中に住んでいるのみのぷち

③ グループ（学生10人で作成）
これはのみのぴことなかがいいぽこのお友達のぴのの好きな猫のたまのお母さんの好きな犬のチャロの隣でねてるまもるの好きなうさぎのぺこのおもちゃのぬいぐるみと２つでひとつのひよこのぺぺのそばで寝ているねこのしゃるるの背中に住んでいるのみのぷち

④ グループ（学生10人で作成）
これはのみのぴこのお友達がいつも可愛がっている犬のへーすけのご近所のまさこさんの姪っ子のあいちゃんのお姉さんのまきちゃんの恋人のはるとくんの買っている猫のみーこの仲良しの猫のかんなちゃんのお気に入りの首輪にあこがれているねこのしゃるるの背中に住んでいるのみのぷち

⑤ グループ（学生10人で作成）
これはのみのぴこが住んでいる犬のシロが大好きなおもちゃを間違えて持ってきちゃったお母さんの化粧道具で遊ぶ子ども達の幼稚園の先生が飼っているハリネズミの餌になる野菜を育てた農家の人が乗っていた車の上に止まっている鳥の巣の中にいる小鳥たちの下で寝ているねこのしゃるるの背中に住んでいるのみのぷち

⑥ グループ（学生10人で作成）
これはのみのぴこの中のいい友達のお気に入りのスカートを買ったお店の店長が飼っているチワワのいつも散歩している公園でいつも遊んでいる友達のお父さんの最近生まれた女の子が使っている毛布の横で寝ているねこのしゃるるの背中に住んでいるのみのぷち

⑦ グループ（学生10人で作成）
これはのみのぴこの双子の妹が通っている学校の担任の先生の子どものたろうくんの飼っている犬のレックスが食べているご飯が入っているお皿を買ったお店の店長さんは双子の妹のお父さんの靴下の横で寝ているねこのしゃるるの背中に住んでいるのみのぷち

⑧ グループ（学生12人で作成）
これはのみのぴこの友達のキキが大好きなクマのぬいぐるみをくれたおばあちゃんが使っているメガネをひろったお医者さんの隣の席にいる男の子のお気に入りのおもちゃの箱の中に入っているミニカーを買ったお父さんの眼鏡を作った職人さんの横で寝ているねこのしゃるるの背中に住んでいるのみのぷち

演習２［つみかさね言葉から造形表現へ繋ぎ、グループ表現へ展開する］

次に演習事例１で作成した言葉を小麦粉粘土で製作する演習に繋げる。これは言葉を造形表現にすることを目的とする。

先ず各自で小麦粉粘土製作を行う為、教師が作るところをカメラを通して見せる。どのようして粘土を作るのかを学生に教える為に併せて、小麦粉粘土製作については小麦粉アレルギー体質の子どもや学生に向けた安全面に配慮することは必須条件であることを伝える。今回の演習は小麦粉アレルギー体質を持つ学生が81人中２人（2.4％）だった。

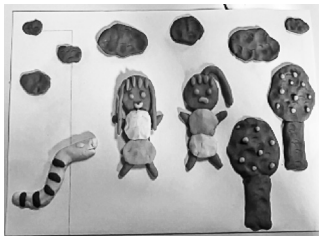
つみかさね言葉と小麦粉粘土の作品を組み合わせた写真絵本作品事例を紹介する。学生は通信端末を通して一人ひとり自分の作品を提出する。その後、教師が話を繋ぎ、授業内でスライド形式の写真絵本として紹介する。実際、保育の現場でも子どもたちは自分の作品を他者に見せることを好んで行う。自他の作品を観ることによって友達との繋がりを感じたり、自分の作品を客観的に観る力を養ったりすることができる。今回の演習でも学生が何より他者に見せることは「楽しい」という感覚を持っている様子が伺われた。これはオンライン上の繋がりであってもつみかさね言葉を通して一つの作品を製作する活動という協働作業が学生間のコミュニケーションを深めるのに役立った証拠と言える。

演習１（事例１）・２をまとめた画像と演習２を作成するにあたり学生自身が工夫した点のコメントを記載する。

① グループ（学生10人で作成）
これはのみのぴこの仲のいい友達のお気に入りのスカートを買ったお店の店長が飼っているチワワのいつも散歩している公園でいつも遊んでいる友達のお父さんの最近生まれた女の子が使っている毛布の横で寝ているねこのしゃるるの背中に住んでいるのみのぷち

特に今回は学生の身近なものを取り入れ工夫した部分に着目し、工夫した点の文章中にある記述について下線を引いた。

担当	つみかさね言葉と小麦粉等粘土作品	工夫した点
教師	これは　のみの　ぴこ	「原文通り」
学生１	これは　のみの　ぴこ**のなかのいい　ともだち** 	普通の犬だと面白くないと思ったのでリボンを付けてみました。**目は海苔**で作りました。作っていて結構甘い匂いがしていたので子どもが作業するときは気をつけた方がいいかなと思いました。また、手に粘土がつくので終わった後の手洗いも必ず行うことが大事だと感じました。
学生２	これは　のみの　ぴこのなかのいい　ともだち**のおきにいりの　すかーと** 	お気に入り感が出るように赤いリボンをつけました。塩をつけてキラキラしているようにしたのですが写真では伝わりませんでした。小麦粉のサラサラとした感じや混ぜている途中のボソボソ、ベチャベチャした感じなど水や油の量を少し変えたりすることでテクスチャーが変わって面白かったです。色を混ぜることによって色の変化も楽しめると思いました。

担当	つみかさね言葉と小麦粉等粘土作品	工夫した点
学生３	これは　のみの　ぴこの なかのいい　ともだちの おきにいりの　すかーと **をかった　おみせ** 	**紙粘土**で製作をしたので、乾くのが早く、形作る前に乾いてしまって、形をきれいにするのが大変だった。色をつけるために、**絵の具**を使用したが、なかなか色がつかず、ついても色がまばらな感じになってしまい、粘土に均等に色をつけるのに苦労した。ワンピースを作るときに、窓から見えるようにしたかったので、ワンピースを小さめに作ること、ワンピースに見えるようにすることが大変だった。また、すぐに乾いてしまうので乾燥しないように早く完成させるのが大変だった。
学生４	これは　のみの　ぴこの なかのいい　ともだちの おきにいりの　すかーと をかった　おみせ**の** **てんちょう** 	洋服を着ているように見えるよう蝶ネクタイとボタンを付けた。またズボンの部分は分かりやすいように線を入れた。
学生５	これは　のみの　ぴこの なかのいい　ともだちの おきにいりの　すかーと をかった　おみせの てんちょう**が　かっている** **ちわわ** 	食紅が購入できなかったので、家にあった**ココアパウダー**でチワワの毛並み感を表現しました。また鼻をつけて耳は**アーモンドチップ**で表現しました。最初油を入れすぎてしまい、すごくネバネバな手触りになってしまい、手にくっついてしまったので粉を足したりして調節した。子どもたちと材料から作るとなった場合は、分量など気を付けて製作を進めたいなと思った。また、柔らかいので、自分の考えている形が作れるので、１人１人違うものができるので、子どもたちは楽しく製作できるのではないかなとも思いました。
学生６	これは　のみの　ぴこの なかのいい　ともだちの おきにいりの　すかーと をかった　おみせの てんちょうが　かっている ちわわ**の　いつもさんぽ** **している　こうえん** 	「感想記載なし」
学生７	これは　のみの　ぴこの なかのいい　ともだちの おきにいりの　すかーと をかった　おみせの てんちょうが　かっている ちわわの　いつもさんぽ している　こうえん**で** **いつも　あそんでいる** **ともだち** 	工夫した点は、たくさん色を使ったところです。木の素材感が出るように木の上の部分を爪で凸凹にしたところも工夫しました。
学生８	これは　のみの　ぴこの なかのいい　ともだちの おきにいりの　すかーと をかった　おみせの てんちょうが　かっている ちわわの　いつもさんぽ している　こうえんで いつも　あそんでいる ともだち**の　おとうさん** 	小麦粉粘土を作ってみて、少ない材料で簡単に粘土遊びができたので、またやってみたいと思いました。もっと色を使えば、いろいろな作品が作れると思いました。粘土が手にひっつきにくいので、後片付けが楽だと思いました。

担当	つみかさね言葉と小麦粉等粘土作品	工夫した点
学生 9	これは　のみの　ぴこの なかのいい　ともだちの おきにいりの　すかーと をかった　おみせの てんちょうが　かっている ちわわの　いつもさんぽ している　こうえんで いつも　あそんでいる ともだちの　おとうさん**のさいきんうまれた おんなのこ** 	食紅を綺麗に混ぜることがとても大変だった。 全てをいい感じに色を混ぜるのか大変だったし、ちぎってくっつけることや形にすることが難しかった。
学生10	これは　のみの　ぴこの なかのいい　ともだちの おきにいりの　すかーと をかった　おみせの てんちょうが　かっている ちわわの　いつもさんぽ している　こうえんで いつも　あそんでいる ともだちの　おとうさんの さいきんうまれた おんなのこ**がつかっている もうふ** 	布団は、ふわふわした感じを出したかったので、少しカーブを付けました。時間があるときに、ベッドや人を作って、遊べるようにしてみたいと思います。また、子どもの顔を思い浮かべながら、粘土を作るようにしました。赤色や緑色、黄色などさまざまな色を扱うことで、綺麗な作品ができると思います。子どもたちは、「魔法」[5]という言葉にすごく興味をもつと思います。いろいろな言葉を使って、楽しく製作したいと思います。
教師	これは　のみの　ぴこの なかのいい　ともだちの おきにいりの　すかーと をかった　おみせの てんちょうが　かっている ちわわの　いつもさんぽ している　こうえんで いつも　あそんでいる ともだちの　おとうさんの さいきんうまれた おんなのこがつかっている もうふ**のよこで　ねている ねこのしゃるる**	「教師作成の為無し」
教師	これは　のみの　ぴこの なかのいい　ともだちの おきにいりの　すかーと をかった　おみせの てんちょうが　かっている ちわわの　いつもさんぽ している　こうえんで いつも　あそんでいる ともだちの　おとうさんの さいきんうまれた おんなのこがつかっている もうふのよこで　ねている ねこのしゃるる**のせなかに すんでいる　のみの　ぷち**	「教師作成の為無し」

Ⅳ　演習１・２振り返って

① 対面授業では扱えない素材……材料の指定は小麦粉・水・油・塩・食紅とした。その他、体質により小麦粉が扱えない学生は米粉や紙粘土や油粘土など各自で扱いやすいものを準備した。

② 身近な道具・身の回りのものを活かす……色付けは食紅とし、様々な色づくりにも取り組むように紹介する。しかし、食紅が用意できない学生は各自の工夫が見られた。子どもの活動には取り入れるかは子どもの年齢により判断が必要ではあるが、演習の上で彩色の工夫を行う材料として、絵具・サインペン・頬紅やアイシャドーなどの色や食材（ココアパウダー・ケチャップ）を使い自由な色彩表現を楽しんでいた。

又、塩・のり・胡麻・枝豆・素麺等の素材を使用した表現の工夫も見られ身近な環境から容易に取り入れる工夫が見られた。

③ 他学生との程よい距離感の中で自己の表現をする……オンライン上では学生側からカメラをオンにすることはほぼ無いので、製作の段階で他の影響を受けることは無く個々の個性的な作品づくりの環境が保たれた。

④ オンライン上の自由な時間を活かす……つみかさね言葉の作成は他の発想を受けて自分が繋ぐという手法をとる為、個々がしっかりと考えることのできるように時間を設定したのでじっくりと取り組めた。

オンライン環境の強みを活かし、更に各自が安全にかつ楽しく演習に取り組める形を工夫した。また保育実践の場では、小学校教育とは違い、幼児期の遊びは環境に影響を受け絡み合い繰り返し積み上げ又同時進行しながら進んでいく。それは保育者の予想もつかない展開になることもしばしば起こる。この演習は設定された遊びではあるが、遊びから遊びに発展していくことを学生が経験する内容とした。更にこの内容は実際の保育の場においてもこのようにオンラインで家庭を結ぶことにより家族や家族同士の繋がりを築く育児支援でも活かせるものと考える。

教師となる学生が領域「表現」を学ぶことは、子どものありのままの表現を理解し援助する力の育成することである。その為には教師として現場に出る前に幼児期に体験した遊びをもう一度再確認・再体験をし、表現そのものの楽しさや表現の幅の広さを再確認することが大切である。オンライン上であっても「遊び」を通して繋がることで自己を表すことが出来、これによって子どもの表現を再体験・理解することが出来る。又、顔の見えない日常の関係性のない学生同士であっても、「遊び」を通して関係が出来、一緒に表現することが出来ていく。また、作品を通して他者の存在や個性を知ることができた。そしてオンライン上であっても自己の表現が集まることで集団としての表現が可能であり充実感も得られることが実感できたのではないか。更に身近なものを素材（音など）に取り入れ、子どもの表現環境を体験する演習を広げていきたい。

V　今後の課題

今回は先行研究にあるようにオンライン上であっても他の学習者の存在は学習に影響を与えることが確認できた。更に「幼児期の環境を通した」学びを経験するには対面授業の演習のみならずオンライン上の強みを活かした幼児の生活や遊びの環境（家庭などの身近な環境）を演習の場所に取り入れることで、演習にあわせた深い学びへ繋がることが確認できた。今後は学内演習とオンラインを活用した学外演習を両立させ、学びの内容にあった環境で進めていきたい。

追記：本文内の造形物とつみかさね言葉作成者からの掲載許可に心より感謝する。

注

1）「オンライン在宅学習環境における学習プロセスに関する考察：学習者の遠隔存在感が与える影響に着目して」教育メディア研究 12 (1), 7 -19, 2006　田口真奈，中原 淳

2）領域表現―事例に学ぶ保育内容　橋本聡子［編著］・小薗江幸子・中村三緒子・長谷部比呂美　著　ペーパー粘土　P58

3）「これはのみのぴこ」作：谷川俊太郎　絵和田誠　出版社：サンリード　発行日：1979年

4）幼児期に言葉の感覚を豊かにするための援助のあり方～「言葉遊び」「お話作り」を通して～うるま市立天願幼稚園 教諭 国吉 貴子　平成22年度

5）食紅を混ぜた小麦粉に水を入れると色水になる。その際に「魔法をかけましょう。ちちんぷいぷい」という言葉を使うことがある。それは子どもたちが水の色の変化を楽しめるようにと保育者が声掛けをする時につかう言葉。